



Title	<書評>Franck Fischbach, La production des hommes ; Marx avec Spinoza
Author(s)	五十嵐, 拓道
Citation	共生学ジャーナル. 2018, 2, p. 159-166
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70633
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

Franck Fischbach

La production des hommes ; Marx avec Spinoza

Librairie Philosophique, 2014, 171 頁

五十嵐 拓道*

Takumi IGARASHI

1. はじめに

本稿で紹介する著作『人間の生産；マルクスとスピノザ』（2005）は、主に『経済学・哲学草稿』（1844）から『経済学批判要綱』（1857-1858）に至る初期及び中期マルクスの思想をスピノザの哲学と照らし合わせて解釈する試みである。マルクスとスピノザを合わせて論じることが、現代思想の領域でしばしば行われてきた。その先駆けはアルチュセール（Louis Pierre Althusser, 1918-1990）であり、弟子のピエール・マシュレー（Pierre Macherey, 1938-）、エティエンヌ・バリバル（Étienne Balibar, 1942-）がそれに続き、またイタリア・アウトノミアの系譜では、アントニオ・ネグリ（Antonio “Toni” Negri, 1933-）がスピノザ論『野生のアノマリー』（1981）を書いている。なぜマルクスとスピノザなのか、それはこれから見ていくようにマルクスを解釈する上でスピノザが重要な示唆を与えてくれるからである。本稿で紹介する『人間の生産』もまた、スピノザを介してマルクスの解釈を方向付けていく。

著者フランク・フィッシュバックは、18～19 世紀ドイツ哲学を主な研究対象とし、近年は社会哲学に関する著作を数多く書いている⁽¹⁾。そもそも18～19 世紀のドイツ哲学は社会を哲学の対象とする伝統をもっていたが、現代の哲学はそれを看過している。そのような認識のもと、社会の問題をあらためて哲学に導入することが彼の仕事の中心を成している。その背景には、新自由主義以降ますます進行する社会の崩壊に抵抗し、社会や共同性の意味を問い直さなければならないという切実な問題意識がある。本稿で紹介する『人間の生産』は、フィッシュバックにとってその理論的な基礎とな

*大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士前期課程（u433088i@ecs.osaka-u.ac.jp）

る部分であると位置付けることができるだろう。

2. マルクスとスピノザの接点（序章～第1章）

実際にマルクスはどの程度スピノザから影響を受けていたのだろうか。『新マルクス＝エンゲルス全集』（現在も編纂中）によれば、マルクスが実際にスピノザの著作を読んでいたかどうかは明らかでないようである。しかし著者フィッシュバックはアルチュセールの研究に依拠し、マルクスはヘーゲルを経由してスピノザの哲学を受容していたと指摘する。ただし、それはヘーゲルによって解釈されたスピノザを受容したという意味ではない。よく知られるように、若いころ青年ヘーゲル派に属したマルクスは、ヘーゲルを批判することから自らの思想形成を始めた。アルチュセールによれば、マルクスはヘーゲル批判を展開する上でスピノザの哲学から多くの示唆を得ているという。マルクスがスピノザを読んでいたという確証がない以上、これは仮説でしかない。フィッシュバックはそう断った上で、もしスピノザの『エチカ』がその存在論をマルクスに提供していたら、もしマルクスがその主要な哲学をスピノザに見出していたら、そのことが生み出す実際の影響はマルクスの著作の中にいかに現われるか、ということを探求しようと提案している。それはまた、マルクスの哲学を明確にヘーゲルに対立するものとして解釈することにもなるだろう。

3. マルクスの存在論（第2章～第3章）

『経済学・哲学草稿』は、若きマルクスがいかなる存在論の立場を取っていたかを示している。この草稿は、疎外論から物象化論へといういわゆる「認識論的切断」以降、ヘーゲルやフォイエルバッハの思想に引きずられた未成熟な思想の断片に過ぎないとして軽視される傾向にある。しかしフィッシュバックによれば、ここで表明されるマルクスの存在論は晩年まで一貫しており、そしてそのような解釈はまさにスピノザとともに読むことによって得られるという。スピノザは人間存在について二つの事実から始める、すなわち「人間は思考する」ということと、「身体は物質によって影響

されていることを感じる」ということの二つである。スピノザにとってこの二つの事実は不可分である、なぜなら身体が影響を受けることによって観念が生み出され、その観念の集合が思考〔精神〕を構成するからだ。したがって、精神は物質、すなわち自然〔延長〕の反映でしかないということになる。一方、マルクスは人間存在をどのように捉えていたのか。フィッシュバックは次の文章に注目する。「人間は、動物と同じように、食べたり、飲んだりすることから始める。ある関係性の中に“いる”のではなく、活動的に振舞うことから、外的世界の物事に働きかけることから、そして必要を満たすことから始める。すなわち、生産することから」（Fischbach 2014:39）。ここから、スピノザ主義者としてマルクスを解釈したとき、次のような存在論が見出せる。すなわち、人間は自然の一部である限り自然に対して受動的な存在であるということ、また人間は自然の諸部分との関係として存在しているということである。のちに『経済学批判要綱』（1857）以降人間が社会的存在として定義されるとき、ここでの存在論が下地になっている。つまり、人間は社会の一部であり、社会関係的存在であるということである。したがってフィッシュバックは、「認識論的切断」は存在せず、『経済学・哲学草稿』における存在論が終始一貫していると主張する。それは、『経済学・哲学草稿』で提示される疎外論によって晩年に至るまでの著作を解釈しうることを意味する。しかしこの場合、疎外論の内容は転倒されなければならない。従来の疎外論はヘーゲルのマルクス解釈に基づいていた。すなわち、疎外とは理性的主体と外的自然を対立的に捉え、主体が自然に従属する状態のことを指していた。しかし、スピノザ的に解釈されたマルクスは人間を自然の一部であると考えた。したがって、この場合の疎外とは人間が自然から切り離されること、主体化することを意味する。ヘーゲルの解釈とスピノザ的解釈では疎外の意味内容が全く逆になる。

人間が自然の一部であり、自然との関係において受動的な存在にとどまるならば、人間にとって存在することは苦しみ、あるいは無力さとしか感じられないだろう。フィッシュバックは、ここで『エチカ』を参照することでこの後のマルクスの議論を方向付ける。その際重要な概念となるのが<コナトゥス>である。<コナトゥス>とは自己を存続させようとする傾向のことであるが、存在するものはただ存在を維持するだけでなく、力能を増大しようとする傾向も持っている。先に確認したように、存在するものは外的世界と

の関係において存在するのだから、力能を増大するには自然との関係を変えなければならない。すなわち、<コナトゥス>には既存の関係を变えて力能を増大しようとする傾向が備わっていると言える。マルクスの人間存在を<コナトゥス>として解釈してみるとどうなるか。人間は既存の社会において存在を維持するだけではなく、力能を増大するために社会関係（＝生産関係）を改変しようとするだろう。人間存在において力能が生産力を意味するならば、人間が存在するということは常に生産力を増大しようとするのである。これは先のマルクスによる人間存在の定義と矛盾しない。このように解釈すれば、受動的だった人間存在がなぜ社会を変えていくことになるのか説明できるだろう。

4. 類的存在としての人間（第4章～第6章）

ここまでスピノザを導き手とした『経済学・哲学草稿』の再解釈を追ってきた。すでに明らかになったように、『経済学・哲学草稿』の時点でヘーゲルに対立しながらマルクスは独自の哲学を確立していたと言えるだろう。その上で、マルクスは経済学の研究に没入していくことになる。なぜ経済学批判なのか。その理由の一つは、経済的社会関係（＝生産関係）が転倒した意識である自己意識、抽象化された主体を生み出していると考えたからである。ここからフィッシュバックは『経済学・哲学草稿』の再解釈によって得られたマルクスの哲学をもとに、『経済学批判要綱（グルントリッセ）』及び『経済学批判』を分析していく。

人間は自然の一部なのであった。したがって、人間は本来的に類的存在としての意識を持っている。また人間は社会的存在でもあるから、類的存在としての意識は社会関係（＝生産関係）の認識となる。人間が他の動物と異なる点は、人間だけが社会関係それ自身を認識できるということ、そしてその社会関係を力能の増大のために変えていくことができるということにある。マルクスは『経済学批判』でハチヤクモを例に挙げている。ハチヤクモは自然に働きかけ、自然を組み替えることで自らの生存を図る。しかしそれ以上のことはしない、つまり動物もまた<コナトゥス>をもってはいるが、一度築いた自然との関係性を別の関係性へと変えることはない。人間だけが自然

との関係性を変えうるのである。しかし、ここにこそ転倒した意識が生じる契機が潜んでいる。マルクス曰く、「動物は直接的に生産活動と一体である。動物は生産活動と異ならず、それ自体である。人間は生産活動それ自体を意志と意識の対象 (*objet*) とする」(Ibid.62)。人間は単に生産するだけでなく、生産を意志と意識の対象とする。つまり、生産活動によって人間の意識は自然を対象化 *objectiver* することになるのである。マルクスはこれを「生産の二重性」と呼ぶ。すなわち、生産活動は類的存在としての人間に本質的であると同時に、一方で自然を対象化し人間を自立的存在であると認識させる場でもあるということだ。そして、この「生産の二重性」の蝶番となるのが<労働>である。人間は類的存在として労働しながら、自然を客体化していく。

労働に伴って、自然が客体化されていく、それは一方で人間が主体化していく過程でもある。マルクスに従えば、主体とは自然から隔離された存在様式に他ならない。ただし、主体化は一息に成し遂げられる訳ではない。本来的に自然の一部である人間は、自然に働きかけることによって、すなわち労働することによって少しずつ自然を客体化し、その過程で生産関係あるいは生産様式も変化していく。ここに歴史の問題が生じる。ヘーゲルは『精神現象学』において、歴史を絶対精神へ至るプロセスだと考えた。それゆえヘーゲル-マルクス主義的観点に立てば、歴史は理念的に展開されることになる。つまり、生産関係の変化を何かしらの理念を実現するためのプロセスだと考えるということだ。そしてヘーゲル的マルクス解釈の見地に立てば、実現すべき理念とは自立的な主体の生産なのであり、それは産業社会によって成し遂げられる。なぜなら、産業社会こそ<労働>によって自然が極限まで対象化（客体化）された社会であるからだ。しかし、スピノザ主義者としてマルクスを解釈するなら、歴史を理念的プロセスとして理解することはできない。そもそも内在的存在論に立脚する限り歴史は存在しない、なぜなら超自然的理念が存在しないからだ。自然に内在する人間にとって、観念は自然によって受動的に形成されるものであった。超自然的理念が形成されるのは、自然から疎外され、転倒した意識によってでしかない。したがってスピノザ主義者に歴史は存在しない、あるのは<コナトゥス>に基づく社会関係の組み換えだけである。経済学批判へ向かうマルクスの課題は、いかにしてこの転倒した意識（幻想）を治療するかである。そのためには、意識は社

会関係によって形成されるのだから、産業社会における生産関係を分析しなければならない。

5. 資本主義と<主体>（第7章～結論）

『人間の生産』では、ほとんど『資本論』の分析は行われていない。フィッシュバックは『経済学批判要綱（グルントリッセ）』及び『経済学批判』に基づいて資本主義社会を分析しているが、主体の問題に着目してその議論を追っていくことにする。資本主義社会とそれ以前の社会を隔てるものは何だろうか。類的存在としての人間にとって、自然は生産する上で所与の条件として現われる。労働はその所与の自然に対して行われていた。ところが、資本主義社会において労働の条件として現われるのは資本である。資本は労働による生産物であるから、資本主義社会における労働の条件は労働力生産物そのものとなる。したがって、労働が自然を客体化する活動である以上、労働の条件は全く客体化されてしまう。つまり、資本主義以前は労働の条件が所与の自然であったのだが、資本主義社会では客体化された資本なのである。それゆえ、資本主義が成立するためにはそれ以前の社会関係を解体しなければならなかった。それは自然の一部として存在する人間を否定することだと言えるだろう。実際には、人間と土地や生産手段との関係を解体することがこれにあたる。そして、マルクスはさらに三つ目の解体について述べる。「労働者自身の内的関係の解体、すなわち直接的に生産の客体的条件に属する活動的労働力との分離」(Ibid.105)である。すなわちマルクスが言っていることは、労働者とその労働力が分離され、労働力だけが生産に必要とされるということである。客体的な生産の条件である資本にとって、生産に必要なのは労働力でしかないのだ。したがって、労働者は「自由な労働者」に、すなわち「客体を持たない純粋に主体的な労働力」となる。労働者は自然との関係を断たれ、抽象的な労働力に還元され、賃金と引き換えに労働力を売る交換価値に過ぎなくなる。マルクスにとって、<主体>とは抽象化された労働力の保持者に他ならないのである。

資本主義社会のもとで、人間はかつて経験したことがない疎外状況に置かれる。人間は存在するためには生産しなければならない、しかし自分で生

産手段を持たない限り資本に労働力を売るしかない。こうして資本によって<主体>が再生産され続ける。意識が社会関係の反映でしかないのだとしたら、いかにして類的本質を取り戻すことができるのだろうか。フィッシュバックは、ここでドゥルーズのスピノザ論を参照しながら無意識の領域に着目する。スピノザにとって意識とは身体が受動的に形成した観念の集合なのであったが、ドゥルーズによれば思考は意識よりも深いものと言う。「身体というモデルは、スピノザによれば、なんら延長に対して思惟(思考)を貶めるものではない。はるかに重要なことは、それによって意識が思惟(思考)に対してもつ価値が切り下げられることだ。無意識というものが、身体のもつ未知の部分と同じくらい深い思考のもつ無意識の部分が、ここに発見されるのである」(Ibid.130)。つまり、思考には社会によって受動的に形成される意識だけでなく、無意識の部分が存在しているのである。それは、身体と思考を並行的に捉えるスピノザにとって、身体に未知の部分が存在することを意味している。ではマルクスにとっての無意識とは何か。フィッシュバックはそれを社会の未知なる部分に結びつける。無意識が社会の未知なる部分を思考するならば、既存の社会関係とは異なる関係を取り結ぶことができるのではないか。したがってマルクスが無意識を社会的であると言うとき、次のように理解しなくてはならない。すなわち、無意識とは自然の要素の間で、構成され、解体され、再構成され、調和し、不調和をおこす関係性なのであると。類的存在という概念はこのようなものとして捉え直されなければならないだろう。

6. おわりに

スピノザを通してマルクスを解釈することで何が得られたであろうか。20 世紀後半以降のマルクス解釈は、アルチュセールらが『資本論を読む』で提唱したように、人間中心主義的な解釈ではなく、より客観的な科学として解釈することが一般的であるように思われる。そのことがマルクス研究を大きく前進させたことは確かだろう。しかし、それによってマルクスの哲学が現実社会に対する批判理論としての価値を失ってしまったことも事実である。このような文脈において、初期マルクスの哲学をスピノザ的に解釈

した疎外論として位置づけ直すフィッシュバックの読解は、社会に対するその批判性を救い戻すものと言える。

本書の主張は至ってシンプルだ。人間の存在は本来的に社会的であると言っているのである。社会的分断や対立が激化する現代社会にあって、共生は喫緊の課題となっている。本書は哲学的に人間存在から共生を考える上で大いに役立つと思われる。

注

- (1) 例えば *Qu'est-ce qu'un gouvernement socialiste ?* (2017)、*Le sens du social. Les puissances de la cooperation* (2015)、*La privation de monde. Temps, espace et capital* (2011)、*Manifeste pour une philosophie sociale* (2009) など。

参考文献

Fischbach, Franck 2014. *La production des hommes; Marx avec Spinoza*, Librairie Philosophique J.VRIN.

スピノザ 1951『エチカ』岩波文庫。

アルチュセール、ルイ 1996『資本論を読む』今村 仁司訳、ちくま学芸文庫。

マルクス、カール 1956『経済学批判』武田 隆夫・遠藤 湘吉・大内 力・加藤 俊彦訳、岩波文庫。

_____ 1964『経済学・哲学草稿』城塚 登・田中 吉六訳、岩波文庫。

_____ 1965『経済学批判要綱』高木 幸二郎訳、大月書店。

_____ 1969『資本論』エンゲルス編、向坂 逸郎訳、岩波文庫。

ドゥルーズ、ジル 2002『スピノザ 実践の哲学』鈴木 雅大訳、平凡社ライブラリー。